

ハイデガー・フォーラム 第13回大会  
2018年9月16日(日) 早稲田大学 戸山キャンパス

ハイデガーとプラトンの対決  
納富信留(東京大学)

### 1、プラトン、ハイデガー、私たち：基本姿勢

ハイデガーはプラトンに向き合いそこで徹底した思索を展開した哲学者の一人である。彼が講義や著作でプラトンのイデア論や存在論を論じ、そこから示唆や問題を見出して自身の思索にしたことを、私たちはまず真剣に受け止めるべきである。プラトンやギリシア哲学の解釈については様々な学術的問題点が指摘されているが、それ以上に彼がプラトンの投げかけた哲学の問いに向き合っ  
て応答したことが重要と考える。それは、プラトンに向けるハイデガーの批判も含めてである。

### 2、プラトンへの私の対決：考察基盤

ハイデガーのプラトンとの対決を受け止めるには、まず、私たち自身がプラトンと対決する中で、その中でハイデガーとも対決しなければならない。それなしでは、たんにハイデガーの内在的な解釈問題となってしまう。

英米分析的手法が主流の現代の古代哲学研究では、海外でも日本でもプラトンの「イデア論」はほとんど真面に理解されていない。私は、その原因を研究者が依拠する4つの基盤(哲学観、経験論、近代認識論、イメージ論)に見定め、イデア論を無意味な空論と見なす偏見を越えて、本来のプラトン哲学を示そうと努めている。[日本語では、拙著『プラトンとの哲学 一対話篇をよむ一』(岩波新書、2015年)第3~5章;「イデアの超越 一魂の変容と現実の開示一」『思想』1097(2015年9月号)を参照]

私が見るところ、『存在と時間』などでのハイデガーの関心は、この理解に多くの側面で呼応する。非本来的なあり方(頹落)から本来的なあり方への変容、存在論的差異(多様な現れ、イデア、善のイデア)、さまざまな配慮の分析などである。ハイデガーとプラトンの近似性(あるいは影響)を見た上で、両者の対決の基盤を見極めたい。

### 3、プラトンへのハイデガーの対決：「真理」への注目

ハイデガーはプラトンの何に応答するのか。焦点は「真理」に向けられる。プ

ラトンは「真理」を概念として論じてはおらず、それ自体で主題にしていない。だが、「真理」への基本的な視座を据え、西洋哲学の起点となったのはプラトンである。本発表ではハイデガーが『ポリテイア』の「洞窟の比喻」を丹念に読み解きながら自身の「真理」の思索と対決させた 1931/32 年冬学期のフライブルク講義を基本テキストとして検討する。[『真理の本質について』、ハイデッガー全集第 34 巻、細川亮一、イーリス・ブフハイム訳、創文社、1995 年を扱う：『プラトンの真理論』（1940 年）との関係は、渡部明、九州大学文学部『哲学年報』53（1994 年）論文参照]。

ハイデッガーが加えた解釈への私の分析と評価は、発表時に紹介する。一つの論点は、先行する「太陽の比喻」との連関にあると考えている。[拙論「プラトン「太陽」の比喻」、山内志朗編『光の形而上学 一知ることの根源を辿って一』、慶應義塾大学出版会（2018 年）参照]。なお、今回は『テアイテトス』を論じる第 2 部は検討する余裕がないことをお断りしておく。

#### 4、ハイデガー、プラトンを超えて：洞窟の内にあること

プラトンとハイデガーが歩調を共にする「洞窟から出る」根源体験としての「アレーテイアー」の哲学は、最後の段階に問題を残す。ハイデガーは第 4 段階（洞窟の内への帰還）に注目したが、その意義を完全には解明できていないように見える。洞窟の外を見た哲学者は内で何を為すのか、いや、そもそも「内にある」と知ることが可能かという問題に、プラトンは後期『ソフィスト』篇で向き合った。私はその意味を「現れの真偽分別としての哲学」と解釈してきたが [拙著『ソフィストと哲学者の間 ープラトン『ソフィスト』を読むー』、名古屋大学出版会（2002 年）参照]、その問題をハイデガーがどう捉えたのか、専門家にご教示いただきたい。

「真理」の根本経験の消失は、プラトンに起因するのか。プラトンが向き合った問いと思索の可能性に、私たち自身が、ハイデガーと共に、ハイデガーを超えて応答してくべきであろう。私たち自身がプラトンによって挑発され揺り動かされる体験、その同行者としてハイデガーの思索を評価したい。

発表では、ハイデガーの研究にあたってきた方々から質問や示唆をいただき、それにプラトンの側から応答することで、哲学の遂行にあたりたい。